

親のもつ子どもの能力についての認識および能力観が 子どもに与える影響について

(中間報告)

同志社大学 田 中 あゆみ

同志社大学 中 野 聖 子

The influence of parents' perceptions of children's competence and parents' theories of intelligence.

Doshisha University TANAKA, Ayumi

Doshisha University NAKANO, Syoko

要 約

子どもは親の考えていることにどのように影響されるのだろうか。本研究は、親による子どもの能力の認識と能力の安定性に関する考え方が、子どもに与える影響を検討することを目的とした。本報告では、小学5年生とその両親を対象に同時期に収集したデータの分析を行った。その結果、親が子どもの能力を高いと思うほど、子ども自身の能力認識や達成心が高いという関係があったことに加えて、特に母親が能力を安定した変わらないものと考えている場合に、親が子どもの能力を高いと認識するほど子どもの挑戦心が高いという、交互作用的関係がみとめられた。これは Pomerantz & Dong (2006) を支持し、親が能力を固定的なものと考えていると、親の考えにしたがう方向に子どもの能力認識や動機づけが変わる可能性があることを意味する。今後は、縦断的な調査を行い因果の方向を明確にし、実際に変化があるのかを検討することが課題である。

【キー・ワード】 親子関係, コンピテンス認知, 動機づけ

Abstract

The present research examined the relationship between parents' perceptions of children's ability and the development of children's competence and intrinsic motivation. The possibility that the relationship is moderated by parents' theories about the stability of intelligence was also examined. In a study of 82 5th grade children and their parents, it was found that among mothers with high entity theories, mothers' perceptions of children's ability were positively related with one of the subscales of children's intrinsic motivation, challenge. The results were consistent with self-fulfilling prophecies hypotheses by Pomerantz and Dong (2006). A 2-wave, longitudinal study will be needed to examine causal direction and influence of parents,

perceptions on changes of children's academic functioning.

【Key Words】 parenting, perceived competence, motivation

問題と目的

子どもにとって、親にどう思われているかということは、自己を形成していく基礎となるといつてよい。特に学童期の子どもの成長には、親が子どもの能力をどう認識しているかは重要である。例えば親が子どもに能力があると思っているほど、子どもの動機づけが高く、成績がよいことなどが報告されている (Eccles, 1983)。そして親による能力の認識が子どもに与える影響は、実際の学業遂行や教師による認識の影響よりも大きいことを示す研究もある (Frome & Eccles, 1998; Wigfield, Eccles, Yoon, & Harold, 1997)。

親による子どもの能力の認知が子どもに与える影響について、近年 Pomerantz & Dong (2006) は、親のもつ能力の安定性に対する考え方を考慮に入れる必要性を示している。一般的に人の能力は固定的で変化するものではないと考える人もいれば、能力は可変的で努力を通じて高めることができるものであると考える人もいるというように、能力観には個人差がある (Dweck, 1990)。前者は実体的知能観 (Entity Theory)、後者は増加的知能観 (Incremental Theory) と名付けられている。実体的知能観を持つと、能力を評価すること、また評価されることが重要になる。失敗は能力が低いことの証明となってしまうので、恐れ避けるべき対象となる。一方、増加的知能観を持つ場合、努力をすることで能力は変わると思われるので、行動の結果で能力を判断せず、失敗へのネガティブ感情は低くなる (Dweck, 1990)。親の養育態度は能力観によって異なると考えられ、親のもつ能力観は子どもの行動や動機づけに重要な役割を果たしていると予想できるが、これまでその影響についてはあまり研究がなされていない。

Pomerantz & Dong (2006) は縦断的な研究を行い、親が実体的知能観を持つと、親の思う方向に子どもの能力認知や動機づけが変わることを見出した。能力は変わらないものであると考える親がその子どもの能力を高いと思うと、実際に子どもの能力認知や自尊心などが高くなり、子どもの能力を低いと思うと子どもの認知も低くなったのである。親が増加的知能観を持つ場合はそのような関係はみとめられなかった。

そこで本研究は上記の知見を追試することを第1の目的とし、以下の2点を検討する。第1に、親による子どもの能力の認識は子ども自身による能力認識や動機づけに影響を与えるのか。第2に、親の持つ能力観によりこの関連性が異なるのかどうか。なお Pomerantz & Dong (2006) は母親のみを調査対象としており、父親からの影響については明らかになっていない。ここから本研究は、母親と父親の両方を対象とすることで、子どもの成長に対して父母それぞれが異なるはたらきをもつ可能性を探ることを第2の目的とする。

方 法

調査協力者と調査概要

京都市内の公立小学校に通う 105 名の 6 年生の児童とその両親に調査の協力を依頼した。児童への調査は教室にて集団で実施された。両親への調査は、子どもが、父親と母親で別々の封筒に入れた説明書・同意書・質問紙が入った封筒を持ち帰る形式で依頼した。封筒は後日学校で回収された。

子どものデータおよび少なくとも父親か母親のどちらかのデータがある 82 名の子どもを分析の対象とした。両親ともにデータがあったものは 61 名、父親のデータがなかったものは 19 名、母親のデータがなかったものが 2 名であった。

質問内容

親に対する調査

1. **親が認知した能力** Frome & Eccles (1998) の用いた質問項目を翻訳し、自分の子どもが算数と国語についてどれだけできると感じているか(例:あなたのお子さんは一般的に見て算数ができると思いますか)を 7 件法で尋ねた(1=できない, 7=できる)。算数と国語についての 6 項目の得点の平均を、母親と父親それぞれが認知した能力尺度の得点とした。 α 係数は母親が .89, 父親が .92 であった。

2. **能力観** Dweck & Henderson (1988) の 3 項目を日本語訳して用いた(「人はある一定の知能をもっていてそれを変えるために何もできないと思う」「人の知能は変えられないものだと思う」「人は新しいことを学ぶことができるが、基本的な知能は変えられないと思う」)(Hong, Chiu, Dweck, Lin, & Wan, 1999)。6 段階尺度で、得点が高いほど、能力が変わるものであるという増加的知能観の程度が強くなるようにした(1=強くそう思う, 6=全くそう思わない)。3 項目の平均を増加的知能観尺度得点とした。 α 係数は母親が .70, 父親が .90 であった。

子どもに対する調査

1. **コンピテンス認知** 子どもが自分の能力をどの程度であると認知しているかを測定するために、Frome & Eccles (1998) の用いた質問項目および Harter (1982) による認知されたコンピテンス尺度の日本語版(櫻井, 1990)を使用した。

Frome & Eccles (1998) の項目では、算数と国語の教科について、どの程度できると感じているか(例:算数は得意ですか)を 3 項目ずつ、7 件法で質問した(1=全く得意でない, 7=とても得意だ)。算数と国語の得点を平均したものを、能力認知尺度とした($\alpha = .80$)。

認知されたコンピテンス尺度は、「学習に関する有能さ(例:勉強はとてもよくできると思います)と「自己価値」(例:今のままの自分でいたいと思います)下位尺度の各 7 項目を採用した。回答形式は、まず 2 つの選択肢から自分に該当するほうを選び(例:勉強はとてもよくできると思います/勉強は、よくできるかどうかわかりません)、さらに選択した文の内容に対してよくあてはまるのかだいたいあてはまるのかを選び丸をつけるという 4 段階評定であった。7 項目の得点の平均を算出し、コンピテンスの認知が高いほど得点が高くなるように得点化した。下位尺度の α 係数は、学習に関す

る有能さが.66, 自己価値が.72であった。

2. 内発的動機づけ Harter (1981) の内発的-外発的動機づけ尺度の日本語版 (櫻井, 1990) から, 「挑戦」(例: やりがいのある, むずかしい問題のほうが好きです), 「達成」(例: 問題がむずかしくても, 自分のできるところまで, やってみようとします), 「知的好奇心」(例: 問題の解き方が知りたいので, ドリルをします) の 3 つの下位尺度 14 項目を用いた。回答形式は認知されたコンピテンス尺度と同様に, まず 2 つの選択肢から 1 つ選び (例: やりがいのある, むずかしい問題のほうが好きです/ かならずできる, やさしい問題のほうが好きです) どの程度あてはまるかを 2 段階で答えるという 4 段階評定であった。内発的動機づけが高いほど得点が高くなるように得点化した。下位尺度の α 係数は, 挑戦 (5 項目) が.87, 達成 (5 項目) が.72, 知的好奇心 (4 項目) が.58 であった。

結 果

1. 親が認知した子どもの能力と親の増加的知能観の基礎統計量

表 1 に, 親が認知した能力尺度と親の増加的知能観尺度の基礎統計量を示した。親が認知した子どもの能力尺度得点の平均値は, 尺度の中央値である 4.0 を上回り, また父親のほうが母親より子どもの能力を高いと認知する傾向があった。対応のある t 検定を行った結果この父親と母親の得点差は有意であった ($t=2.35, p<.05$)。ただし両親が認知した子どもの能力には高い相関があり, 父親と母親で子どもの能力について全く異なる考えを持っているわけではないようである。

親の増加的知能観の平均値をみると, 尺度の中央値は 3.5 であることから, 「能力は持って生まれたもので変わらない」と思うより, 「能力は変わる」と思う傾向が強かったといえる。父親と母親の得点について対応のある t 検定を行ったところ有意な差が認められ ($t=2.07, p<.05$), 父親のほうが母親より有意に増加的知能観を持つ傾向があった。

表 1 親が認知した能力と親の増加的知能観の平均値, 標準偏差, 得点範囲と尺度間相関

	平均値	標準偏差	範囲	1	2	3
1. 母親が認知した能力	4.29	1.18	1.00-7.00	-		
2. 父親が認知した能力	4.58	1.29	1.00-7.00	.73*	-	
3. 母親の増加的知能観	4.39	1.19	2.00-6.00	.08	.00	-
4. 父親の増加的知能観	4.85	1.24	1.00-6.00	.04	.26*	.20

* $p<.05$

2. 子どものコンピテンス認知と内発的動機づけの基礎統計量

表 2 に, 子ども自身のコンピテンス認知尺度と内発的動機づけ尺度の下位尺度の基礎統計量を示した。能力認知の平均値は, 親の認知と比べると低い傾向がみとめられた。能力認知と学習に関する有能さ尺度と内発的動機づけには中程度の相関があり, コンピテンス認知が高い子どもほど内発的動機づけも高いことがわかる。

表2 子どものコンピテンス認知と内発的動機づけの平均値, 標準偏差, 得点範囲と尺度間相関

	平均値	標準偏差	範囲	1	2	3	4	5
コンピテンス認知								
1. 能力認知	3.84	1.07	1.00-6.33	-				
2. 学習に関する有能さ	2.32	0.56	1.00-4.00	.57*	-			
3. 自己価値	2.27	0.62	1.14-4.00	.20	.30*	-		
内発的動機づけ								
4. 挑戦	2.45	0.82	1.00-4.00	.42*	.47*	.13	-	
5. 達成	2.93	0.57	1.00-4.00	.26*	.38*	.19	.49*	-
6. 知的的好奇心	2.46	0.62	1.00-4.00	.36*	.39*	.22	.36*	.32*

* $p < .05$

3. 親が認知した子どもの能力および親の能力観と子どものコンピテンス認知および内発的動機づけの関係

子どものコンピテンス認知と内発的動機づけに対する親の認知の影響を検討するために、子どもについての6つの変数を従属変数、親の2つの変数を独立変数とした重回帰分析を、母親と父親別々に行った(表3)。

まず、コンピテンス認知との関係をみると、親が認知した能力は、子どもの能力認知と学習に関する有能さと有意な関係があり、親が子どもの能力を高いと認知するほど、子どもも自分の能力は高いと認知しているという関係が表れている。ただし親が認知した能力と子どもの自己価値との関係は有意ではなかった。

次に内発的動機づけとの関係をみると、母親が認知した能力と達成に有意な関連があり、母親が子どもの能力を高いと思うほど、その子どもは達成心が高いという関連があった。親の増加的知能観については、子どもの能力認知や内発的動機づけと有意な関係はなかった。

表3 親が認知した能力および親の増加的知能観と子どものコンピテンス認知および内発的動機づけの関係

親の変数(独立変数)	子どもの変数(従属変数)					
	コンピテンス認知			内発的動機づけ		
	能力認知	学習に関する有能さ	自己価値	挑戦	達成	知的的好奇心
母親が認知した能力	.36*	.49*	.14	.14	.23*	.22
母親の増加的知能観	-.06	-.02	.06	-.06	.18	-.09
R^2	.13*	.23*	.02	.03	.09*	.05
父親が認知した能力	.42*	.41*	-.09	.20	.26	.26
父親の増加的知能観	-.22	-.01	-.20	-.03	.04	.14
R^2	.18*	.16*	.06	.04	.08	.10

* $p < .05$

さらに、親が認知した能力と子どものコンピテンス認知や内発的動機づけとの関係が、親の持つ能力観によって異なるかという交互作用的関係を検討するために、親の認知した能力と能力観の積項を作成し、重回帰分析に投入した。このとき独立変数はセンタリングした上で用いた (Aiken & West, 1991)。

その結果、子どもの内発的動機づけ下位尺度の挑戦に対して、母親が認知した能力と母親の増加的知能観の有意な交互作用がみとめられた ($\beta = -.30, p < .05, R^2 = .09, p < .10$)。その他の有意な交互作用はなかった。

図 1 に、この交互作用効果を表す単回帰直線を示した。図から、母親が「能力は変わらない」という実体的知能観を持っている場合は、母親が認知した能力が高いほど子どもの挑戦得点が高いという正の関係があるが、母親が「能力が変わる」という増加的知能観を持っている場合は、逆に母親が認知した能力が高いほど子どもの挑戦得点は低いという負の関係があることがわかった。

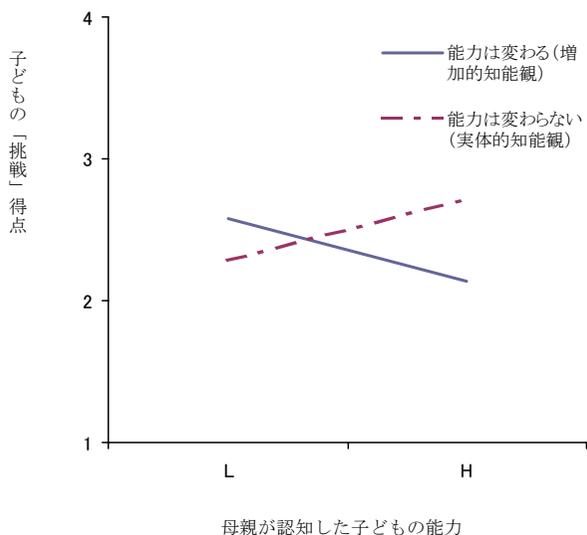


図 1 母親が認知した子どもの能力と子どもの挑戦得点の関係の母親の能力観による違い

考察と今後の課題

本研究は Pomerantz & Dong (2006) に基づき、親による子どもの能力認知と子ども自身の能力認知の関係を、親の能力観による交互作用も含めて検討した。まず父親・母親ともに、親が子どもの能力を高いと思うほど子どもも自分を有能であると認知しているという有意な関係がみとめられた。また内発的動機づけに対しては、親の要因との相関は相対的に弱かったが、母親の能力認知が高いほど子どもの達成心が高いという有意な関係があった。子どもの能力認知と内発的動機づけの間には中程度の相関があったことを含めて考えると、親による能力認知の影響は、子どもの能力認知には直接的、

また内発的動機づけには子どもの能力認知を介した間接的なものであると推測できる。

また親の能力観による交互作用については、母親が実体的知能観を持つ場合は、母親が認知した能力が高いほど子どもの挑戦得点が高く、増加的知能観を持つ場合は逆の関係があるという有意な交互作用がみとめられた。これは Pomerantz & Dong (2006) で示された結果と一致していた。

ただし本調査のデータは同一時点で収集したものであり、親の認知が子どもの認知を変えているかどうかはわからない。因果の方向性を明確にし、子どもの成長に対する親の影響をより正確に理解するために、今後は、縦断的な調査を行い、親の子どもに対する認識の違いで実際に子どもに変化があるのかどうか検討する必要があるだろう。父親と母親の影響の違いについての考察も、縦断的調査の結果を待つ必要がある。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Dweck, C. S. (1990). *Self-theories: Their role in motivation, personality, and development*. New York: Psychology Press.
- Dweck, C. S., & Henderson, V. L. (1988). Theories of intelligence: Background and measures. Unpublished manuscript.
- Eccles, J. S. (1983). Expectancies, values and academic behaviors. In J. T. Spence (Ed.), *Achievement and achievement motives* (pp.75-146). San Fransisco: Freeman.
- Frome, P. M., & Eccles, J. S. (1998). Parents' influence on children's achievement-related perceptions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 435-452.
- Harter, S. (1981). A new self-report scale of intrinsic versus extrinsic orientation in the classroom: Motivational and informational components. *Developmental Psychology*, 17, 300-312.
- Harter, S. (1982). The perceived competence scale for children. *Child Development*, 53, 87-97.
- Hong, Y., Chiu, C., Dweck, C. S., Lin, D. M-S., & Wan, W. (1999). Implicit theories, attributions, and coping: A meaning system approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 588-599.
- Pomerantz, E. M., & Dong, W. (2006). Effects of mothers' perceptions of children's competence: The moderating role of mothers' theories of competence. *Developmental Psychology*, 42, 950-961.
- 櫻井茂男 (1990). 内発的動機づけのメカニズムー自己評価的動機づけモデルの実証的研究ー 風間書房
- Wigfield, A., Eccles, J. S., Yoon, K. S., Harold, R. D., Arbretton, A., Freedman, C., & Blumenfeld, P. C. (1997). Change in children's competence beliefs and subjective task values across the

elementary school years: A 3-year study. *Journal of Educational Psychology*, 89, 451-469.

謝 辞

調査に協力下さいました小学校の先生方および児童・保護者の皆様に心より感謝申し上げます。